

より良い高校教育へ向けて

—— カリキュラム・マネジメントの調査と実践 ——

長期研修員 松本 拓也 鏝田 規人

《研究の概要》

カリキュラム・マネジメントの実現に向け、県内外先進校視察による調査とグランドデザイン作成のための校内研修を所属校で実践した。

ワークショップ型校内研修を通してグランドデザインを作成することで教職員の教育活動への前向きな気持ちが高まった。一方で、教職員の考え方の違いや教育活動重点化の必要性が明らかになったため、生徒に育成する資質・能力の共通認識を教科横断的な視点で持つ必要があることが分かった。

教科横断的な視点で学校の教育活動を捉えていくための方策として、グランドデザインの活用によるPDCAサイクルの確立と探究的な学びの充実による学校教育目標の実現を提案する。

キーワード 【後期中等教育・高等学校 グランドデザイン ワークショップ型校内研修
教科横断的な学び 外部資源の活用 総合的な学習の時間】

群馬県総合教育センター

分類記号：H03-03 平成29年度 263集

I 研究の概要

現在、知識基盤社会を支えていく人材づくりのための高大接続改革（高等学校教育改革・大学入学者選抜改革・大学教育改革の三位一体の教育改革）が進んでおり、平成29年度末には高等学校の学習指導要領の改訂も告示される見込みである。『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（平成28年12月21日）』にあるように、次期学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の理念の下、子供たちに新しい時代を切り拓いていくために必要な資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの確立と「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められる。本研究では、新たな時代を生きる子供たちに必要な資質・能力を育てていくためのカリキュラム・マネジメントの在り方を探るため、県内外の学校での調査、所属校における校内研修の実践、県内への情報発信をはじめとした普及を三つの柱として研究を進めた。

1 調査

(1) 各協議会・研修会への参加

県教育委員会所管事業である群馬県高校生ステップアップサポート事業、探究型教育活動推進事業の各協議会を視察し、国・県の教育に関する方針の理解に努め、県内の学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進状況を知ることができた。

(2) 先進校視察・学校訪問

主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善の現状とカリキュラム・マネジメントの推進状況について知るため、県外先進校6校（茨城県立並木中等教育学校・茨城県立竹園高等学校・茨城県立土浦第一高等学校・山梨県立吉田高等学校・東京都立国立高等学校・東京都立小石川中等教育学校）を視察し、県内6校（県立前橋高等学校・前橋女子高等学校・高崎高等学校・吉井高等学校・桐生南高等学校・藤岡中央高等学校）を調査した。

2 実践

所属校である高崎女子高等学校（以下、高女）及び県立太田高等学校（以下、県立太田）において、グランドデザイン作成のための校内研修を計7回（高女4回、県立太田3回）行った。校内研修の前には、管理職に加えて教務主任や群馬県高校生ステップアップサポート事業コーディネーターの教諭とも打合せをし、学校の抱える課題などについて聞き取りをすることで実態に即した研修となるようにした。実践した校内研修の詳細についてはIIで述べる。

3 普及

(1) プレゼンテーション

調査と実践の経過報告のため、各種研究協議会や委員会などでプレゼンテーションを行った。会によってはワークショップ形式を取り入れ、参加者に校内研修で用いた手法を体験していただくことができた。群馬県高等学校長協会教育課程委員会（9月）では、カリキュラム・マネジメントの概要説明、茨城県先進校視察の報告、高女・県立太田での校内研修の状況報告に加え、参加者に校内研修の手法を体験していただくためのワークショップを行った。第2回公立高等学校・公立中等教育学校・県立特別支援学校副校長・教頭研究協議会（10月）及び第2回公立高等学校・公立中等教育学校・県立特別支援学校教務主任研究協議会（10月）では、カリキュラム・マネジメントの概要説明と校内研修の状況報告を行った。新任教務主任研修（10月）では、カリキュラム・マネジメントの概要説明と校内研修の状況報告に加え、「1時間でできる！グランドデザイン作成」と題したワークショップを行った。第3回公立高等学校・公立中等教育学校・県立特別支援学校副校長・教頭研究協議会（1月）、群馬県高校生ステップアップサポート事業コーディネーター研修会（1月）、ぐんま教育フェスタ（2月）では、1年間の研究の概要、校内研修の成果と見えてきた課題、カリキュラム・マネジメントの三側面の実践事例を紹介し、より良い高校教育に向けての提言を行った。

(2) 「ぐんま高校授業改善新聞」の発行

県外先進校での授業改善の現状やカリキュラム・マネジメントの推進状況と所属校での校内研修の様子を県内高等学校などの教職員に向けて発信することを目的として、県内の希望する高校等を対象に「ぐんま高校授業改善新聞」を発行した。職員室等で気軽に読んでもらえるよう、毎回A4一枚に記事をまとめ、カラーで作成して写真や図も使用した。主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善の実践例については、県外先進校での事例に加え、群馬県総合教育センター特別研修員の研究や群馬県高校生ステップアップサポート事業推進研究員の取組も紹介することで、授業改善をより身近に感じられるようにした。

II グランドデザイン作成のための校内研修

1 グランドデザインについて

(1) グランドデザインの意義

グランドデザインとは、目指す学校像や育みたい生徒像をはじめとする、学校の教育活動全体の構想図のことであり、県内でも吉井高校や藤岡中央高校などでは既に作成されている（図1）。グランドデザインがあることにより、学校の教育方針がより明確になり、教職員は同じ目線に立って教育活動を行うことができる。グランドデザインの作成にあたって教職員が生徒の実態を共有し、学校教育目標を明確化することはカリキュラム・マネジメントの推進にもつながる。また、グランドデザインを学校説明資料やポスターとして活用することにより、学校から保護者や地域への情報発信力を強化することもできる。

(2) カリキュラム・マネジメントの指針としてのグランドデザイン

『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（平成28年12月21日）』

によると、カリキュラム・マネジメントとは、「子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する学校教育目標を実現するために、学習指導要領等に基づき教育課程を編成し、それを実施・評価し改善していくこと」であり、教科横断的な視点による教育内容の組織的配列、PDCAサイクルの確立、外部の人的・物的資源の活用という三つの側面から捉えることができる（この三側面についてはⅢで詳しく述べる）。教科横断的な視点で教育課程を編成し、実施・評価・改善していく上で、全体計画（グランドデザイン）がその指針となる。

(3) グランドデザインの作成方法

『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（平成28年12月21日）』では、カリキュラム・マネジメントは「全ての教職員が参加することによって、学校の特色を創り上げていく営み」とも言及され、校長又は園長を中心としつつ、全教職員でカリキュラム・マネジメントを実現することが求められている。よって、学校のグランドデザイン作成においても、校長又は園長等、特定の教職員のみが関わって作成・見直しを行うのではなく、全教職員が関わって作成・見直しを行うことが望ましいと考える。そこで、ワークショップ型校内研修の手法を取り入れてグランドデザインを作成することとした。

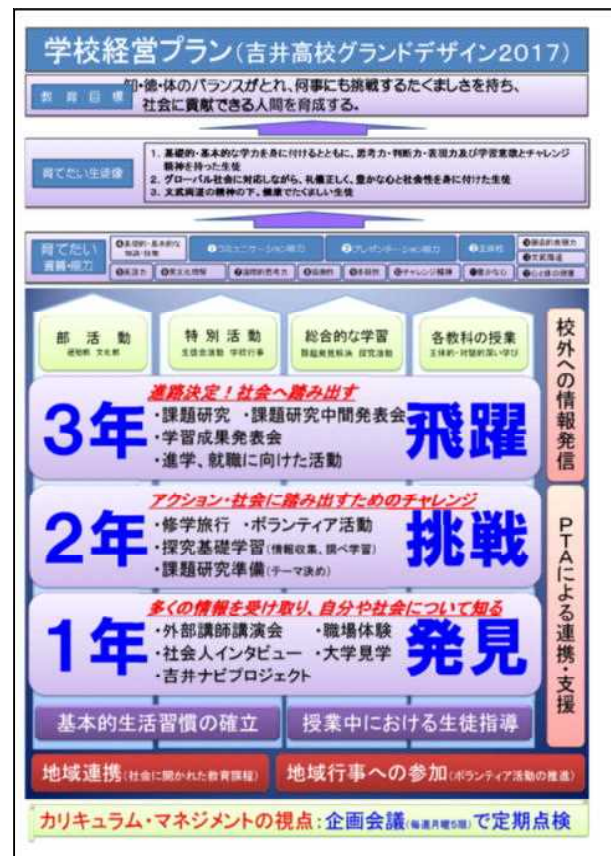


図1 吉井高校のグランドデザイン

(4) ワークショップ型校内研修

ワークショップ型校内研修とは、講義中心の一方的な研修とは異なり、参加者全員が共通の課題に取り組み、双方向的なやり取りの中で成果を生み出す研修である。ワークショップ型校内研修は参加者が主体的に進める研修であるとともに、成果物が残ることで達成感を得られる研修でもある。すでに授業研究会などでは県内の高校などにおいても広く取り入れられており、グランドデザイン作成のための校内研修においてもこの手法を応用できると考えた。

(5) ワークショップ型校内研修の実践例

東京都立小石川中等教育学校では、平成28年度に文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール事業の一環として、全教員参加の校内研修において生徒の課題や育成したい力、その力を育成するための具体的手立てについてグループで意見交換を行った。また、群馬県立桐生南高等学校では、平成29年度の群馬県高校生ステップアップサポート事業に係る校内研修において、生徒に身に付けさせたい資質・能力、その資質・能力を育成するために教科・科目の授業や学校行事等でそれぞれの教員がどのような指導を行っているかについてグループで協議した。

2 ワークショップ型校内研修の進め方

(1) グランドデザイン作成に必要な三つの要素

県内外の作成例を分析し、グランドデザイン作成に必要な要素として、「生徒の実態」、実態から考えた「生徒に育成する資質・能力」、資質・能力育成のための「具体的取組」の三つがあると考えた。例えば、「真面目で素直だが主体性に欠ける」という生徒の実態があるとする、育成する資質・能力として「主体性」が考えられる。そして主体性を育成するための具体的取組として「課題研究」などが挙げられる。なお、生徒の実態については、教職員がそれを共有して生徒に育成する資質・能力を検討することが主眼であり、グランドデザインには含めないこともある。自治体によっては、生徒の実態に加え、地域の期待や自治体の方針などを掲載したグランドデザインも作成されている。

(2) 所属校での校内研修の流れ

グランドデザイン作成に必要な三つの要素を踏まえ、それぞれの所属校で3回ずつの校内研修を企画した(図2)。なお、高女については、「具体的取組」について小グループではなく全体で再検討するための時間を追加したため、全4回の研修となった。第1回の校内研修では、それぞれの所属校で生徒の実態把握を行うため、生徒・学校の強みと課題を学習面と生活面に分けて考えた。第2回では、生徒の実態を踏まえてそれぞれの所属校の生徒に育成する資質・能力を考え、その資質・能力を育成するための具体的取組について、現在行っている取組や新たに取り入れたい取組を考えた。

県立太田の第3回では、第2回で考えた資質・能力と具体的取組を使って作成したグランドデザインの案を基に協議し、案の加筆・修正を行った。高女の第3回では、第2回で出てきた具体的取組について、三つに絞って全体で意見交換を行った。高女の第4回では、第2回、第3回の議論を踏まえて作成されたグランドデザインの案を基に協議し、案の加筆・修正を行うとともに、グランドデザインに掲載する学校のキャッチフレーズを考えた。



図2 所属校での校内研修の全体計画

高女の第4回では、第2回、第3回の議論を踏まえて作成されたグランドデザインの案を基に協議し、案の加筆・修正を行うとともに、グランドデザインに掲載する学校のキャッチフレーズを考えた。

(3) 所属校での校内研修の進め方

それぞれの校内研修では、参加者が共通の情報を基に協議を行うため、文部科学省の方針や先進校視察の成果について短時間（10分程度）で情報提供を行った。その後、まずはその日のテーマについて個人で考え、次に4～5人のグループで意見を共有しながら更に考えを深めていき、グループでまとめた考えを全体で共有した（図3）。個人やグループで考える際には、思考ツールなど様々な研修の手法を活用し、思考を拡散・収束しやすくした。また、グループ構成も工夫し、専門教科や年齢が異なる先生を組み合わせさせたグループを作ることで、教科横断的で世代を超えたコミュニケーションの場となるようにした。

校内研修の進め方

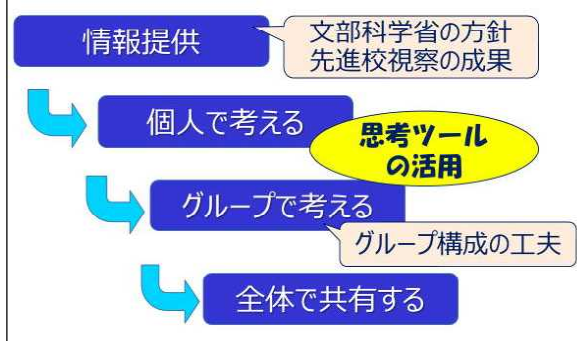


図3 所属校での校内研修の進め方

研修の内容によっては同じ教科を指導する教員を集めたグループや、同じ学年を指導する教員を集めたグループを作ることも考えられるが、今回は学校全体のグランドデザインを考えることが研修の目的であったため、このようなグループ編成とした。

(4) 校内研修で活用した様々な研修の手法

① 生徒・学校の強みと課題の把握に活用した手法

ア マトリクスシート

マトリクスとは $n \times n$ の表のことである。今回の校内研修では生徒・学校の強みと課題を個人で考え、付箋に書き出す際に活用した（図4）。付箋をマトリクス上に貼り付けていくことで、強みと課題の数を比べることができると考えた。付箋は項目ごとに色分けすることにより、グループで意見をまとめる際にも見やすくなるようにした。生徒の強みは青、学校の強みは緑、生徒の課題は黄色、学校の課題はピンクの付箋に書いた。マトリクスの本来の意味からすると縦列に1、2、3と数字を入れるべきであったが、自明であるため割愛した。

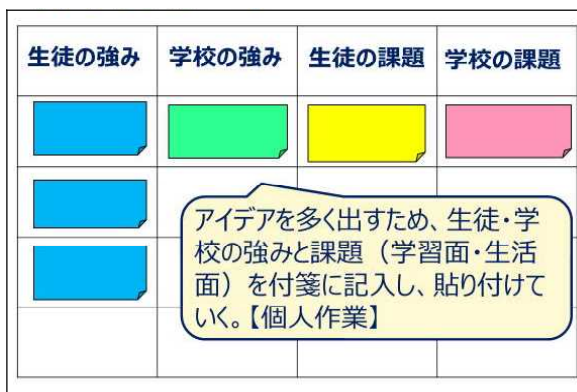


図4 マトリクスシート

イ 概念化シート

概念化シートとは、縦軸と横軸があり、出された意見などを四つのゾーンに振り分けることで思考の収束を助けるシートである（図5）。振り分けた意見はグルーピングしてタイトルを付けることもできる。今回の校内研修では、それぞれの参加者がマトリクスシートに貼った付箋の内容を4～5人のグループで共有する際に活用した。強みと課題を学習面と生活面に分けて貼ることで、より多面的に生徒や学校の強みと課題を把握でき、貼り付けた付箋をグルーピングしていくことでそれぞれの参加者が考える「強み」と「課題」の共通点を明らかにすることができた。また、他者の意見に触れたことで新たな視点を得られ、課題と考えていたことが強みとして捉え直されたり、自分では気付かなかった強みに気付くことができた。

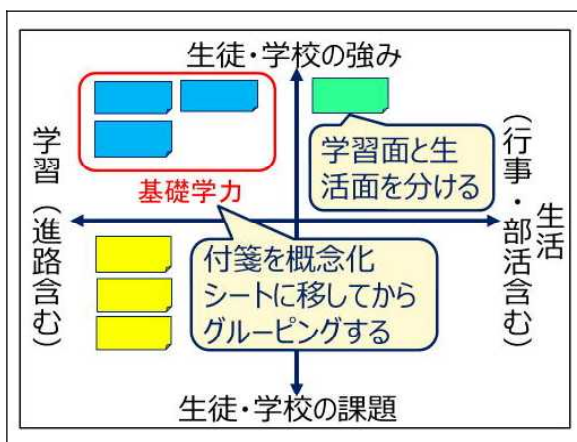


図5 概念化シート

ウ ワールドカフェ<アレンジ版>

ワールドカフェとは、カフェにいるようなリラックスした雰囲気の中、参加者が少人数に分かれたテーブルで自由に対話を行い、他のテーブルとメンバーをシャッフルしながら話を発展させていく手法である。今回の校内研修では、各グループのうち一人が発表者として他のテーブルに移動し、自分の班で作成したシートの内容を他のテーブルにいるメンバーへ説明した(図6)。テーブルを移動しながら何回か発表を繰り返すことで意識の共有が進むとともに、発表者も発表に慣れ、リラックスした雰囲気で発表することができていた。

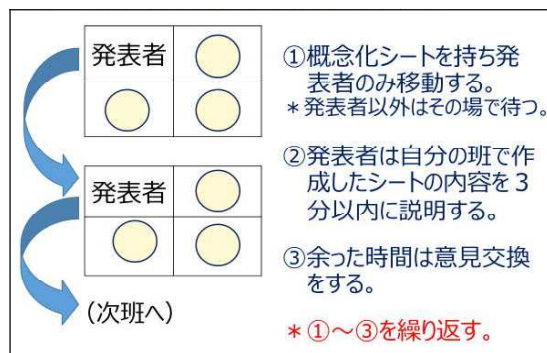


図6 ワールドカフェ<アレンジ版>

② 育成する資質・能力及び具体的取組の検討に活用した手法

ア ブレインライティング

ブレインライティングとは、紙に書きながらブレインストーミングを行う手法である。グループのメンバーそれぞれが一定時間以内に三つのアイデアを考えて紙に書き、時間が来たら左隣の参加者に紙を渡す。渡された紙に書いてある前の人の書いたアイデアから着想して関連するアイデアを書いたり、新たなアイデアを書いたりする。今回の校内研修では、グループで考えた生徒に育成する資質・能力について、その育成のために「すでに行っていること」「見直すべきこと」「新たに取り組むこと」を書き出した(図7)。三つを並べて考えることで、現在行っている教育活動がどんな資質・能力を育てているかという「意味付け」を行えるとともに、新たな取組を始めるためには現在行っている取組を見直す(やり方を変えたり、取り止めたりする)必要があると意識することができる。

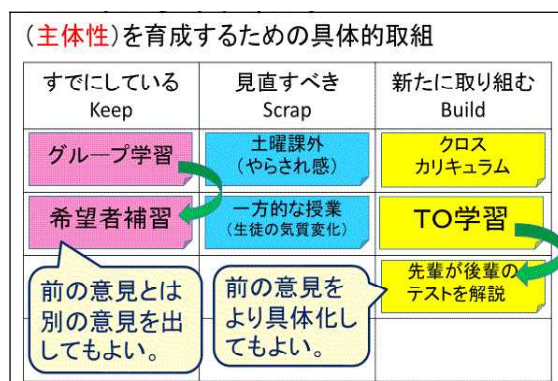


図7 ブレインライティング

イ フィッシュボーンシート

フィッシュボーンとは、魚の骨という意味で、その図が魚の骨に似ているところから名付けられた。フィッシュボーンシートは、ある目標の達成に向けて必要な手立てを整理するために使うことができる。図8は県立太田で使用したフィッシュボーンシートである。文武両道・質実剛健という学校教育目標に向かって、生徒に育成する資質・能力を1~5の枠内に書き込み、ブレインライティングで付箋に書き出した具体的取組を小骨の部分に貼り付けられるようになっており、付箋を色分けして整理することで「すでに多くの取組が行われている」「取り入れたい取組はあるが、それを行うためには既存の取組を見直さなければならない」などの気付きが生まれる。

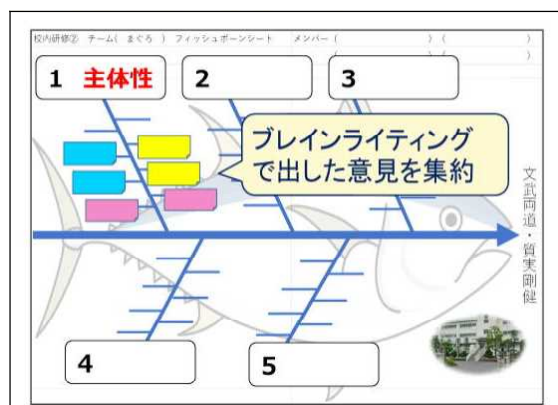


図8 フィッシュボーンシート

ウ ワールドカフェ<アレンジ版>

前述した①(ウ)と同じ手法だが、第2回の校内研修では班ごとに作成したフィッシュボーンシートの内容を他の班と共有するために活用した。第1回と同じ手法を使用したことにより、短時間で効率的に意見交換することができた。

エ マインドマップ

マインドマップとは、メインとなるトピックを紙の中央に書き、関連した内容を放射上に書いていく手法である（図9）。英作文の内容構成や課題研究のテーマ設定などに活用されることもある。高女での第3回校内研修において、資質・能力育成のための具体的取組の再検討を参加者全員で行う際に利用した。全体像を把握しやすいマインドマップを取り入れ、図9のようにパソコンで入力したものをプロジェクタで投影することにより、参加者は常に他の参加者の出したアイデアを見ながら自分のアイデアを考えることができた。

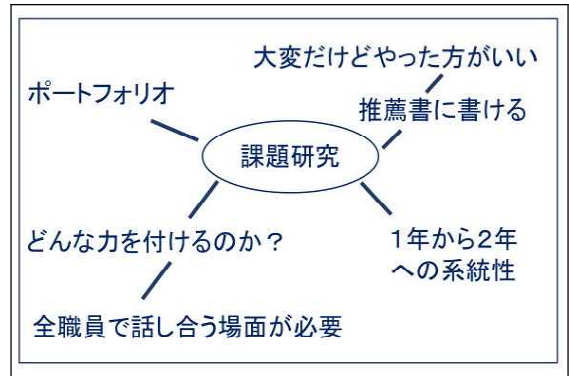


図9 マインドマップ

③ グランドデザインの検討に活用した手法

ア グランドデザイン拡大シート

概念化シートとフィッシュボーンシートの内容を素材としてグランドデザインの案を作成し、それを拡大印刷したものを「グランドデザイン拡大シート」として県立太田の第3回、高女の第4回校内研修で使用した（図10）。「グランドデザイン拡大シート」を見て気付いたことを直接シートに書き込んだり、付箋に書いて貼り付けたりした。県立太田では育成する資質・能力の妥当性について班ごとに検討し、その後資質・能力育成のための具体的取組を考えた。高女では、五つの資質・能力についてどの学年で重点的に育成するかを考え、次にその資質・能力育成のためにはどんな具体的取組があるかを考えた。

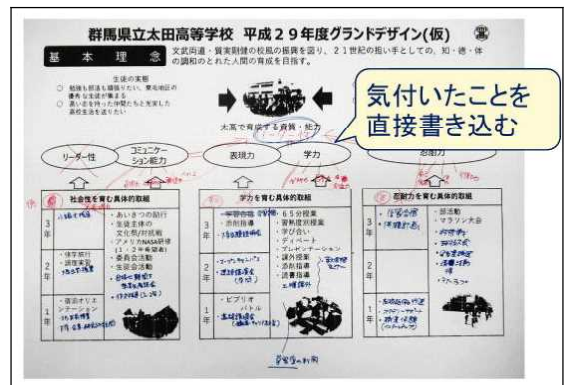


図10 グランドデザイン拡大シート

イ 簡易ポスターセッション

ポスターセッションとは、個人やグループで研究したことや調べたことなどをポスターとしてまとめ、それを基に発表し、参加者と質疑応答などを行う討議法である。県立太田の第3回校内研修では、あらかじめセッションをする班を指定して行った。班の代表者が自分の班で検討した「グランドデザイン拡大シート」の内容を他の班に3分程度で発表し、質疑応答を行った。高女の第4回校内研修では、参加者全体の前でそれぞれの班の代表者が発表した。これらのほかに、それぞれの班の発表スペースを作り、発表者以外の参加者が自由に見て回る形式も考えられる。

3 グランドデザインの作成例

県立太田での第3回、高女での第4回校内研修を経て、両校のグランドデザインの最終的な案が作成された。県立太田のグランドデザイン（案）は育成する三つの資質・能力を中心に置き、その周りに資質・能力育成のための具体的取組が列挙されている（次ページ図11）。具体的取組については、各学年で行われるものと、複数の学年にわたるものや三年間継続して行われるものが分けて書かれている。このグランドデザインがあることにより、教職員は学校の教育活動を俯瞰したり、指導の目線を合わせたりすることができる。一方、高女のグランドデザイン（案）には小・中学生にも分かるようなキャッチフレーズ（認め合う 高め合う 「全力投球」）が書かれており、育成する五つの資質・能力について、どの学年で重点的に育てるのか、またそのためにどんな具体的取組があるかが写真で示されている（次ページ図12）。一目で学校の重点的な取組が分かるため、対外的な広報活動に使うことで学校の発信力強化にもつながるグランドデザインとなっている。



図11 県立太田のグランドデザイン (案)



図12 高女のグランドデザイン (案)

4 校内研修の成果

(1) 当事者意識の高まり

グランドデザイン作成をテーマとしてワークショップ型校内研修を行うことにより、参加者一人一人の学校経営に対する当事者意識を高めることができた。参加者は自分の教科の授業のことだけでなく、学校全体としてどのように生徒を育てようとしているのかを考えることができた。「高女のこと、生徒・教員のこと大好きになりました。すてきな良い学校にしていきたい気持ちが高まりました(高女・第4回校内研修アンケートより)」という感想も寄せられており、当事者意識の高まりが「もっと良い学校にしたい」という前向きな気持ちにつながっている。

(2) 教育活動への思いを共有

ワークショップ型校内研修が教職員のコミュニケーションの場となり、それぞれの参加者がどのような思いを持って教育活動を行っているかを共有することができた。「職員の方々が同じように強さ、弱さを感じ、どのような方向性で生徒の力を伸ばしたいのかを考えており、熱い気持ちを感じられた。グランドデザインをイメージしたい(県立太田・第1回校内研修アンケートより)」という感想も寄せられており、自分以外の教職員の思いを知ることが、当事者意識の高まり同様、教育活動への意欲向上につながっている。

(3) 具体的な成果

ワークショップ型校内研修によって当事者意識が高まり、教育活動への思いの共有ができたことにより、参加者は日々の教育活動へより積極的に取り組むようになり、具体的な成果を上げることができている。その中で、校内研修との関わりが深いと考えられるものを三点挙げたい。

① 主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善

高女では、世界史と日本史で主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善が行われた。いずれの科目でも主体的な学びを促すためのペア学習やグループワークを取り入れるとともに、生徒と教員の双方向的なやり取りを目指した授業作りを行った。校内研修を通して県外先進校や自校の他教科で取り組まれている授業改善の手法に触れ、「生徒に何ができるようになるか」という視点

で授業を見直したことが授業改善につながった。

② グランドデザインとの関わりを示した学習指導案の作成

県立太田では、授業の評価規準に「グランドデザインとの関わり」を示した学習指導案が作成された。校内研修において、学校の教育活動を「生徒に何ができるようになるか」という視点で見直した経験を経て、それを授業の評価にも応用したものである。

③ 英語外部検定試験にスピーキングテスト導入

県立太田では、英語の外部検定試験にタブレット端末を使用したスピーキングテストを導入した。英語科として生徒に育成する資質・能力を考えたとき、「英語を話す力」を育成するためにはそれを客観的に測定しなければならないと考え、外部検定試験を活用した。スピーキングテストの導入により、生徒のスピーキング能力を客観的に評価できたことに加え、生徒のスピーキング学習に対する意欲を高めることにもつなげることができた。

5 校内研修で見えてきた課題

(1) 教職員の考え方の違い

ワークショップの中で意見を交換する中で、生徒の実態や生徒に育成する資質・能力について、あるいはそれぞれの教育活動がどのような資質・能力を育てているかについて、参加者それぞれの考え方に違いがあることが明らかになった。参加者からは「資質・能力の共通するイメージがまだまだできていない、というのが正直な感想です（県立太田・第2回校内研修アンケートより）」という率直な感想も挙げられた。

(2) 教育活動の重点化の必要性

生徒の実態から生徒に育成する資質・能力を考え、資質・能力育成のための具体的取組を挙げていく中で、多くの具体的取組を挙げられる資質・能力もあれば、具体的取組を挙げるのが難しい資質・能力もあった。そこで、参加者は生徒の資質・能力育成のために新たな取り組みを行う必要性を感じる一方、「多忙はどの班、どの教員も感じていることなんだと分かりました（高女・第1回校内研修アンケートより）」「思っていること、感じている事は他の先生も同じだということに気づいた。また、課題も同じなので、職員で考えて解決策を探りたいと思った。やるべき事、やった方がいい事を考え、プランを立てる時間がほしい（県立太田・第1回校内研修アンケート）」などの感想も寄せられているように、現状の業務に対する多忙感も見受けられた。そこで、生徒の資質・能力育成のための新たな取組を行うには、既存の取組を見直しながら教育活動を重点化していく必要がある。

(3) 課題解決の方法

それぞれの教職員が同じ目線で教育活動を行っていくため、まずは生徒に育成する資質・能力の共通したイメージを教科横断的な視点で持つ必要がある。次に、その共通したイメージを基に既存の取組を見直し、新たな取組を始めるためのPDCAサイクルを構築することが必要である。そして、新たな取組として課題研究などの探究的な学びを充実させるためには外部資源も積極的に活用する必要がある。これらのカリキュラム・マネジメントの三側面については、Ⅲで詳しく述べる。

6 まとめ

ワークショップ型校内研修というコミュニケーションの場が設定されたことにより、概念化シートやフィッシュボーンシート、あるいはグランドデザインという形で学校の現状が可視化された。現状が可視化されることで教職員の当事者意識を高め、具体的な成果が生まれると同時に、教育活動重点化の必要性などの課題も明らかになった。こうした現状の可視化による成果と、現状の可視化から見えてきた課題は共にカリキュラム・マネジメントを推進するものである。すなわち、ワークショップ型校内研修が教職員の心に火を付け、より良い学校づくりのきっかけになったと言える。よって、このようなワークショップ型の校内研修がより多くの学校で取り入れられることが、群馬のより良い高校教育につながると考える。

Ⅲ カリキュラム・マネジメントの三側面

1 カリキュラム・マネジメントについて

「カリキュラム・マネジメントの実現にあたっては、管理職のみならず全ての教職員がその必要性を理解し、日々の授業などについても、教育課程全体の中での位置付けを意識しながら取り組む必要がある」（文部科学省教育課程企画特別部会 論点整理）とある。また、カリキュラム・マネジメントについては、次の三つの側面から捉えることができる。

- ①各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点でその目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ②教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
- ③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。
(中教審答申) (平成28年12月21日)

これら三つの側面について、県内外の学校視察から得られた取組について紹介する。

2 カリキュラム・マネジメントの三側面についての実践事例

(1) 教科横断的視点での取組事例（茨城県立竹園高等学校）

三側面の一つ目は、カリキュラムデザインであり、学校における取組を教科等横断的視点で俯瞰して見る事が求められている。その中で、茨城県立竹園高等学校ではクロスカリキュラムを積極的に実践している。昨年度は3学年合わせて約40回の実践を行っている。表1はその抜粋である。例えば3年生では生物と体育の教員が連携し「筋肉におけるエネルギー供給」というテーマでチームティーチングとして実践した。この授業後の教員の感想には、「講義、実習の流れの中でより深くクロスして情報提供できた生徒の興味関心が高まっていることが感じられた」とある。

表1 竹園高校クロスカリキュラムの抜粋

学年	実施教科	実施形態	内容
3年	生物+体育	チームティーチング	筋肉におけるエネルギー供給
3年	数学+英語+漢文	教材作成開発	対数
3年	化学+数学	チームティーチング	反応速度と微分方程式
3年	現代文+数学	教材作成開発	評論文
2年	生物+家庭+化学	教材作成開発	物質循環
2年	物理+体育	チームティーチング	斜方投射と円運動
2年	生物+英語	チームティーチング	光合成
2年	物理+世界史	チームティーチング	ケプラーの法則
2年	数学+美術	チームティーチング	黄金比
1年	国語+世界史	チームティーチング	史伝「鶏口牛後」

他にも連携の方法として教材開発としてのスタイルもある。クロスカリキュラムを実践して得られた効果として次の二つが挙げられた。

- ア 他教科の授業を知ることで、自分自身の授業改善につながった。
- イ 他教科の教員と連携することで、自然と学校の目線合わせにつながった。

アについては、「自分の専門以外の授業を見ることで、授業の進め方や先生の発問の仕方、あるいはICT機器の使用や思考ツールの使用方法など自分の授業改善のヒントとなることが多く得られた」という感想が見られた。他教科の授業を参観することは、授業に対する先入観や固定観念を取り払い、自らの授業改善につながると考えられる。県内においても群馬県立桐生南高等学校では、異なる教科の先生同士で班を作り、その班の中で互いに授業見学を行い、改善につなげている取組を行っている。このように、県内外の学校視察において、授業改善について話を聞くと、同教科の授業見学は教科内容を深めるものとして役立つ傾向があり、他教科の授業見学は新しい授業法を学ぶ機会となったり、他教科での生徒の様子を見るのが生徒理解に役立ったりする傾向があること

が分かった。

イについては、クロスカリキュラムを行ってみて、副産物として出てきた効果とのことである。昨年度だけでも約40回のクロスカリキュラムを行っているということは、以前からも含めると相当な回数を実施していることになる。それだけ様々な教員がチームを組む中で、授業以外の話、例えば生徒のことや学校のことなど日常的な話が増えてきたことで、自然な流れで学校が目線合わせにつながったと言う。

教育活動を今すぐに教科等横断的視点で見直すことは難しいと考えられる。クロスカリキュラムを手掛かりに、自分の教科以外のことも理解し、連携を図ることで、徐々に全体が俯瞰できるようになっていくのではないかと考える。

(2) PDCAサイクルの確立における実践事例（群馬県立吉井高等学校）

三側面の二つ目はPDCAサイクルの確立である。群馬県立吉井高等学校では、県内でも先駆けてグランドデザインの作成に着手した。グランドデザイン作成の成果として、教育活動一つ一つをゴールから逆算して見ていくことが、そのための準備はいつから始めるべきかという視点の共有につながった。その結果、学校で行われている様々な取組について、全体バランスを見ながらより教育効果が高まるような取組の配置を各教職員が考えられるようになったとのことであった。また、グランドデザインには生徒に身に付けさせたい資質・能力も明記してあり、各教科での学びや学校行事、部活動、課外活動などでもそれを意識した指導が行われている。学校が目線合わせの一つとしても活用されている。

また、原則月曜5限には「企画会議」という時間を設け、グランドデザインを「学校の教育活動全体を見渡す地図」として使用し、現在学校で行っている取組についての課題や改善策を話し合うといった評価・改善を行っている（図13）。ここで出た案は、職員会議などで職員全体で共有している。この企画会議は、運営委員会とは別のメンバーで行い、より様々な意見を出したり集約したりするために、思考ツールなども積極的に使っており、活発な会議となっている。付箋を使ったり発言時間を1分以内としたりするなどの工夫もしている。



図13 吉井高校「企画会議」の様子

(3) 外部資源の活用での実践事例（山梨県立吉田高等学校）

三側面の三つ目は外部資源の活用である。学校教育目標実現のために、校内だけではなく、地域の有効な人的・物的資源を積極的に活用していくことが求められる。

その点で山梨県立吉田高等学校では、課題研究において山梨県にある健康科学大学や山梨県立産業技術短期大学、昭和大学、そして地元の企業と連携し、生徒の課題研究がより探究的なものとなるよう外部資源を最大限活用している。その成果もあり、課題研究で陥りやすい「調べ学習」といった単に情報収集してまとめるだけのものになることはないということであった。吉田高校はスーパーサイエンスハイスクールやスーパーグローバルハイスクールなど文部科学省の指定事業を受けている学校ではない。それでもこのように複数の大学などと連携を図ることができているのは、吉田高校の職員が連携を図るために何度も大学と交渉し、人脈を築いていったからこそということだった。

外部資源の活用が求められているが、そのためには学校がどのような目的を持って、生徒にどのような資質・能力を身に付けさせたいのかを明確にし、それを基に連携先との交渉を進めなくてはならない。社会に開かれた教育課程が求められているように、対外的にも各学校のミッションを明確にする必要性がますます高まっている。Iで紹介したワークショップ型校内研修で作成するグランドデザインは、生徒に育成する資質・能力の明確化と学校の発信力強化につながるため、こうした

外部資源の開拓にも役立ち、社会に開かれた教育課程の実現にも資するものである。

IV 提言

1 県内外の学校視察から見えてきた課題

昨年度高校籍長期研修員の提言「学校の方向性を定めて組織的に授業改善を行っていく」を引き継ぎ、今年度は校内研修や県内外の学校視察、得られた情報の発信等の実践を行ってきた。その中で、一定の成果は得られるとともに、課題も同時に見えてきた。それは、「学校の教育活動を教科等横断的視点で見えていく部分について、十分とは言えない現状があるのではないだろうか」ということだ。この解決のヒントとなり得るものが、平成28年12月に出された中教審答申での「総合的な学習の時間における教育のイメージ」の中にある、「探究の見方・考え方」である。

<探究の見方・考え方>

各教科等における見方・考え方を総合的・統合的に活用して、広範かつ複雑な事象を多様な角度からふかんして捉え、実社会や実生活の複雑な文脈や自己の在り方生き方と関連付けて問い続けること。

この考え方は教科等横断的視点で教育活動を見ていく一つのヒントとなり得るものと考えられる。探究的な学びは教科の学習につながるものであり、各教科の学習で身に付けた「見方・考え方」を教科横断的に活用する場が総合的な学習の時間である。

さらに高校の部分に着目していくと、最初の文言は、高等学校の総合的な学習の時間を、「より探究的な時間となるよう位置付ける」とある。そして最後には、「各学校の教育目標に直接つながり、その高校のミッションを体現するものとなるようにする」と記載されている。これは小中高の各学校段階のうち、高校にしか記載されていない文言であり、特に高校はここに注目していかなければならないことを表している。

学校教育活動における教科等横断的視点の課題に対し、それを克服していくための鍵が、この総合的な学習の時間ではないだろうか。学校で行われている様々な教科の学び、そして学校行事や部活動、課題活動などの学び、そこで生徒が学んだ見方・考え方を、総合的な学習の時間において十分な活用を図る。そのために学校はミッションの体現となる内容を準備する必要がある。その整備に教科等横断的視点を働かせ、より効果的に教育活動の成果が上がるよう考えていかなければならない。そして、その実施により、おのずと学校教育目標の実現につながっていくシステムを作っていくことが求められている。

また、次期学習指導要領における教科・科目についても、「探究」がキーワードになっている。今後はますます、各授業の中でも探究的活動を積極的に取り入れていく授業改善が求められる。

2 平成29年度長期研修員からの提言

(1) グランドデザインを活用したPDCAサイクルの確立

学校における様々な教育活動において、各教職員が評価・改善を行うことは大切であるが、学校組織として考える場合、個々の価値観が影響してしまい、全体として方向性が揃えられなくなってしまう可能性も否定しきれない。この点を解消するために、ワークショップ型校内研修で作成したグランドデザインが重要な鍵となる。グランドデザインを指針として、そこに掲げた目標を達成するためという視点で議論を交わすことが重要ではないだろうか。学校組織として生徒に身に付けさせたい資質・能力を育むためにどのような改善が必要となってくるのかをベースに評価・改善を行っていくことが重要であると考えられる。

(2) 探究的な学びの充実による学校教育目標の実現

様々な教科で学んだ「見方・考え方」、あるいは学校行事、部活動、課外活動などで学んだこと

を総合的な学習の時間で活用する。どのような内容で活用させていくかは各学校のミッションにより異なるであろう。しかし実施後に生徒に身に付けさせたい「資質・能力」が、その学校のミッションの体現となる内容を準備する必要がある。さらに、探究活動により、ますます各教科の学びが重要となることに気付かせる工夫も取り入れ、教科の学力の向上により探究活動を深めていく。そして探究活動が深まると教科の学力の大切さに気付くといった、スパイラルな学びのサイクルを確立することが求められる。こうしたサイクルを意図的に作るために、総合的な学習の時間と教科の学習内容がつながっていく教科横断的な学習指導計画を作成することが今後なお一層求められていく。

3 まとめ

今年度の研修を通して、グランドデザイン作成によって学校の方向性を定めるための校内研修を実施し、全職員でその検討に当たった過程に大きな意義があった。互いに共通認識を持ち、学校のベクトルを定めていくことはチーム学校としての組織力を高めることにつながる。さらに、次期学習指導要領では、「探究」がキーワードの一つとなる。今の生徒たちが成人して社会で活躍する頃には、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新などにより、社会や職業の在り方そのものも大きく変化する可能性が高い。我々教員がそうなる未来を見据え、今まで生徒に「何を教えるか」に重点を置いてきたことを見直し、今後は生徒が「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」に重点を置くことが不可欠である。この視点を持って今後も組織的な授業改善に努め、全教職員でカリキュラム・マネジメントを推進していく必要がある。

<参考文献>

- ・文部科学省 中央教育審議会 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（平成28年12月21日）』
- ・文部科学省 中央教育審議会 初等中等教育分科会 『教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）（平成27年8月26日）』
- ・独立行政法人 教員研修センター 編 『教員研修の手引き2016—効果的な運営のための知識・技術—』（2016）
- ・村川 雅弘 著 『ワークショップ型校内研修 はじめの一步』 教育開発研究所（2016）
- ・田村 学 編著 『カリキュラム・マネジメント入門』 東洋館出版社（2017）
- ・田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵 編著 『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』 ぎょうせい（2016）

<担当指導主事>

坂本 直之 小野 智信